禅家語録 I

西谷啓治
柳田聖山 編

世界古典文学全集

36A

筑摩書房

禅家語録 I　　世界古典文学全集　第36巻A

昭和47年12月15日第一刷発行

編　者　西谷啓治
柳田聖山

発行者　井上達三

発行所　株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8
振替東京 4123 電話 (291)7651
郵便番号 101—91

(分類) 0315 (製品) 20336 (出版社) 4604

目次

達摩二入四行論　柳田聖山訳　5
六祖壇経　柳田聖山訳　67
頓悟要門　平野宗浄訳　181
黄檗伝心法要　入矢義高訳　259
臨済録　秋月龍珉訳　307
趙州録　秋月龍珉訳　387
あとがき　519
各編解題　柳田聖山

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

禅家語録 I

達摩二入四行論

禅は達摩からはじまるが、多くの宗教の祖師がそうであるように、彼の伝記と思想は、分厚い神秘のヴェールにつつまれている。

達摩および初期禅宗の学問的な研究がはじまったのは、今世紀に入ってからのことである。敦煌で発見された古文書群のうちに、若干の禅文献が含まれていたのが動機である。しかもそうした古文献の研究は、単に古い資料を提供しただけではなくて、初期の禅を歴史的に見る眼をひらかせた。あたかも、パーリ文献による初期仏教の研究の場合とおなじように。

敦煌本『達摩二入四行論』は、達摩のことばを伝える最古の文献である。ここには、達摩とその周辺に集まった初期禅宗の人々の、素朴で力強い肉声がこもっている。それらの理解は後世のように固苦しい理論を前提する必要がない。しかも禅の歴史と思想のすべては、この本から出てくると言ってよい。

『達摩二入四行論』の一部は、すでに敦煌本発見以前より知られていた。一般に中国仏教史の基本史料とみられる道宣（五九六―六六七）の『続高僧伝』の達摩伝をはじめ、宋初に編まれた『景徳伝燈録』巻三十の「菩提達磨略弁大乗入道四行并弟子曇林序」や、わが国に伝えられた『小室六門』の「二種入」がそれである。さらに朝鮮で編まれた『禅門撮要』の「菩提達摩四行論」は、すでに敦煌本の大半に相当する。しかし、そうした確認ができたのは、すべて敦煌本発見以後である。むしろ、従来はこれらの文献に対して、きわめて低い評価しか与えぬのが普通であった。それらは達摩の真説ではない、せいぜい弟子たちの部分的な聞書きだろうとみられる程度であった。敦煌本の発見が、そうした見方を大きく変えたのは当然である。

もちろん、『達摩二入四行論』は、今なおはっきりせぬ多くの問題を含んでいる。編者すらかならずしも確かでないし、テキストもまだ決定に至らぬ。さらに、敦煌資料の研究者は、ややもすると伝承資料を軽視しやすい。それは、従来の評価の偏向と変らない。今日は、それらの性質の異なる資料を整理し、いちいちの資料の成立事情と思想内容を明らかにする要がある。そうした新しい仕事の出発は、敦煌本『達摩二入四行論』をどうよむかにかかっていると言える。この資料を読むことは、ひっきょう中国禅そのものを読むことになるはずである。今はまずそうした意図のもとに、この資料の発見以後、多くの研究者によって提起されて来たさまざまの課題を踏まえつつ、本文そのものの理解をすすめることとする。

いったい、敦煌本『達摩二入四行論』に重要な資料価値を認めたのは、鈴木大拙の『少室逸書』（昭和十年）が最初である。この書は、北京本宿字九九号その他の関連資料をコロタイプ版で紹介したものであり、その本文批評は、『校刊少室逸書及解説』（昭和十一年）に至って発表された。この仕事に大きい役割を果たしたのは、先にいう『禅門撮要』であり、これまで『小室六門』の一部をなしていた「安心法門」もその抜萃であることが判明した。さらに、これまで『宗鏡録』九九で知られていた蔵禅師、縁禅師、安禅師その他の人々の言葉についても、やはり同じことがわかった。言うならば、『達摩二入四行論』は、これまで部分的に知られていた初期禅宗文献の同一ソースだったのである。

さらにその後三十年ばかりの間に、この資料は北京本のほかに、大英博物館のスタイン第二七一五号および三三七五号をはじめ、フランス国民図書館のペリオ本第二九二三、三〇一八、四六三四の都合六本の写本もしくは断片のあることがわかり、それらのあるものは、北京本にない部分を含んでいることも確認された。したがって、この資料のテキストは、今後さらに新しい異本の発見がないとも限らないし、達摩と初期禅宗の研究はなお大きい可能性を残すとも言える。ただし、ここに収めるテキストは、かつて北京本を底本としてその不備を他の写本と刊本で補訂した「禅の語録」第一冊の『達摩の語録』のそれである。本文決定の次第については、同書の解説を参照されることを希望する。

なお、この資料の標題は、敦煌本の首部が破損しているために、今日のところすべてが不明である。わずかにスタイン第二七一五号の末尾に、「論一巻」とあるのが知られるのみである。『禅門撮要』『小室六門』『宗鏡録』などに見られる標題が、いずれも一部分の名にすぎぬことは言うまでもない。今回、全体の標題を『達摩二入四行論』としたのは、あくまで便宜的であるが、この資料の最初の紹介者である鈴木大拙の命名を記念し、達摩の二字を冠することによって、新しい禅文献研究の出発としたのである。また、達摩は従来ほとんど達磨と書かれたが、敦煌本の発見によって、古い達摩の字を用いるのが近来の通例である。

弟子曇林序

〔一〕 法師者、西域南天竺国人、是大婆羅門国王第三之子也。神恵踈朗、聞皆暁晤。志存摩訶衍道、故捨素従緇、紹隆聖種。冥心虚寂、通鑒世事、内外俱明、徳超世表。悲悔辺隅正教陵替、遂能遠渉山海、遊化漢魏。亡心之士、莫不帰信、取相存見之流、乃生譏謗。于時唯有道育恵可、此二沙門、年雖後生、俊志高遠、幸逢法師、事之数載、虔恭諮啓、善蒙師意。法師感其精誠、誨以真道。如是安心、如是発行、如是順物、如是方便。此是大乗安心之法、令無錯謬。如是安心者壁観、如是発行者四行、如是順物者、防護譏嫌、如是方便者、遣其不著。此略序所由、意在後文。

弟子曇林の序

法師は、西域・南天竺国の人、是れ大婆羅門国王の第三の子なり。神恵踈朗にして聞くこと皆な暁晤す。その志は摩訶衍の道に存す、故に素を捨てて緇に従い、聖種を紹隆して、心を虚寂に冥し、世事を通鑒して、内外を俱に明らめ、その徳は世表に超えたり。辺隅の正教の陵替を悲悔して、遂に能く遠く山海を渉り、漢魏に遊化す。亡心の士は、帰信せざる莫きも、相に取らわれ見を存する流は、乃ち譏謗を生ず。時に唯だ道育・恵可なるもの有り、此の二沙門のみは、その年後生なりと雖も、俊志高遠にして、法師に逢えることを幸いとし、之れに事うること数載、虔恭に諮啓して、善く師意を蒙る。法師も其の精誠に感じ、誨うるに真道を以てすらく、「是の如くに安心し、是の如くに発行し、是の如くに物に順い、是の如くに方便する、此れは是れ大乗安心の法なり、錯謬すること無から令めよ」と。是の如くに安心するとは壁観、是の如くに発行するとは四行、是の如くに物に順うとは、譏嫌を防護し、是の如くに方便するとは、其をして著せざらしむるなり。此に略して由る所を序す、意は後文に在り。

先生は、わが国の西方にあたる南インドの出身で、大バラモン国王の第三子であった。透徹した知性をそなえ、何を聞いてもすべて通暁された。かねてから大乗の真理に一念をこめ、世俗の服を脱いで黒衣の修行者となり、聖なる伝統を承けついで盛んにし、心を限りなく静かな根底にひそめるとともに、あまねく世間のことを見通し、内外の学問をすべてあきらかにされて、その徳望は高く世の人をぬきんでた。さらに、海外の国々における仏教の衰えを遺憾とされて、はるかに海山を超え、わが漢魏の地に宣教においでになった。素直な心の人々は、誰もみな帰依したが、形式にとらわれ主義主張にこだわる人々は、やがて悪しざまに非難しはじめた。

そのとき、道育と恵可というものがあり、この二人の修行者だけは、なおいまだ若輩ながら、すぐれて高邁な志をもち、先生にお遇いしたことを喜び、数年のあいだ弟子としてつかえ、つつましく指導をうけ、よく先生の精神を心に体した。先生も彼らの誠意に感動し、真理の奥義を伝えられた。(それはのちに述べるように)、かようかように心をおちつけ、かようかように行動し、かようかように世の人とうちとけあい、かようかように人を助成するという教えであり、これこそは、大乗的に心をおちつける方法であり、人々に誤りなからしめようというのであった。その心のおちつけ方とは壁のように静かに心を内省することであり、その行動のしかたとは四つの実践であり、他の人とのうちとけあい方とは、戒律を守って世の非難を防ぐことであり、人々への助成のしかたとは、それらの方法に執著せぬ努力をいうのである。以上要約してその教えの由来を述べた、詳細は後の本文にゆずる。

○曇林　詳しい伝を欠くが、『続高僧伝』の恵可伝によると、恵可の親しい友人で、賊に僧をきられたために無譬林とよばれた。別に、『勝鬘経』の研究者として知られ、吉蔵の『勝鬘宝窟』に、無譬林疏・林公注なるものの一部を伝えている。○西域　ここではインドを指す。中国人が西方諸国、およびインドをよんだ通称。○南天竺国　インドを東西南北および中央の五つの地方に分けて呼ぶとき、その南部を指す。当時、南天竺は大乗仏教の発祥地

と見られていた。○大婆羅門国王　バラモン教を奉ずる国の王。中国人は、インドをバラモン教の国と考えていたらしい。○摩訶衍道　大乗仏教の立場。摩訶衍は、マハーヤーナの音写で、偉大なる乗りものの意。○虚寂　大いなる静けさ。ニルヴァーナの境地。○通鑒世事　世間のことを知るのは、仏のすぐれた徳の一つである。仏の十号の一に、世間解（世間を知った人）、無上師（この上もない指導者）、調御（人々を調える御者）などとある。○漢魏　中国をいう。○道育　詳しい伝はわからない。別に恵育ともよばれたようで、『続高僧伝』第三十五（明本）の法沖伝によると、「達摩より『楞伽経』を授けられ、法を受けて心に行じ、口に説くことはかつてなかった」とある。○恵可　のちに、禅宗の第二祖とされる人。『続高僧伝』第十六に詳しい伝記がある。○如是安心　安心については、〔五八〕をみよ。『続高僧伝』に、この部分をそのままとっているのは、この資料にもとづいて書かれた証拠であり、その逆ではない。○発行　行動を起すこと。『天台小止観』では発心に対して起行といい、浄土教では安心に対して起行という。すなわち、自証した真理を、身、口、意の三業の上に決意し実践する義。○順物　世俗の慣習を尊び、人情にしたがうこと。○方便　元来は、サンスクリットのウパーヤの訳語で、人々を導き、真理に近づかしめる意。具体的な施設、第二義的方法をいう。○壁観　壁は、内を守って外をへだて、ものを寄せつけぬのにたとえる。こうした瞑想法は、まったく他に見られぬが、『続高僧伝』第二十に、「大乗壁観の功績はもっとも高い」と言っているから、他の方法とことなるすぐれた特色をもっていたと思われる。○防護譏嫌　空見を防ぐために、第二次的に世俗の戒律を守ること。『大般涅槃経』第十一に、性重戒（それ自体として重要な戒）と息世譏嫌戒（世俗のそしりを防ぐための第二次的な戒）の二種を分ち、前者に殺・盗・婬・妄の四種を、後者に「軽い秤や小さい斗で販売すること、悪意をもって人を繫縛すること、灯明をつけたまま寝ること、童男童女や奴婢童僕を蓄えること」などの四十戒を掲げている。○遣其不著　物や心の束縛をはなれること。『続高僧伝』第十六に、那禅師の弟子の恵満が、もっぱら無著をつとめて、つねに一衣一食し、ただ二針を蓄えて、冬は補布を乞うて裏をつけ、夏はそれを捨ててわずかに裸身を覆うのみであったと言い、文字通りの無著行を実践するものがあったらしい。また、わが智証大師円珍の『教相同異』によると、「禅宗は『金剛経』と『維摩経』による宗旨で、即心是仏を宗とし、心無所著を業とし、諸法空を義とする」と言っている。

〔二〕　夫入道多途、要而言之、不出二種。一是理入、二是行入。理入者、謂藉教悟宗、深信含生凡聖同一真性、但為客塵妄覆、不能顕了。若也捨妄帰真、凝住壁観、自他凡聖等一、堅住不移、更不随於文教、此即与理冥符、無有分別、寂然無為、名之理入。行入者、所謂四行、其余諸行、悉入此行中。何等為四、一者報怨行、二者随縁行、三者無所求行、四者称法行。云何報怨行。修道行人、若受苦時、当自念言、我従往昔、無数劫中、棄本従末、流浪諸有、多起怨憎、違害無限。今雖無犯、是我宿殃悪業果熟、非天非人所能見与。甘心忍受、都無怨訴。経云、逢苦不憂、何以故、識達本故。此心生時、与理相応、体怨進道、是故説言報怨行。第二随縁行者、衆生無我、並縁業所転、苦楽斉受、皆従縁生。若得勝報栄誉等事、是我過去宿因所感、今方得之、縁尽還無、何喜之有。得失従縁、心無増減、喜風不動、冥順於道、是故説言随縁行。第三無所求行者、世人長迷、処処貪著、名之為求。智者悟真、理将俗反、安心無為、形随運転、万有斯空、無所願楽。功徳黒闇、常相随逐、三界久居、猶如火宅。有身皆苦、誰得而安。了達此処、故於諸有、息想無求。経云、有求皆苦、無求則楽。判知無求真為道行。第四称法行者、性浄之理、目之為法。此理衆相斯空、無染無著、無此無彼。経云、法無衆生、離衆生垢故。法無有我、離我垢故。智者若能信解此理、応当称法而行。法体無慳、於身命財、行檀捨施、心無悋惜。達解三空、不倚不著、但為去垢、摂化衆生、而不取相。此為自利、復能利他、亦能荘厳菩提之道。檀施既爾、余五亦然。為除妄想、修行六度、而無所行、是為称法行。

夫れ道に入るは途多けれども、要して之れを言えば、二種を出でず。一は是れ理入、二は是れ行入なり。理入とは、教に藉りて宗を悟り、深く含生の凡聖同一真性にして、但だ客塵に妄覆せられて、顕了することを能わざるのみなることを信ずるを謂う。若し妄を捨てて真に帰し、壁観に凝住して、自他凡聖等一に、堅住して移らず、更に文教に随わざれば、

此に即ち理と冥符して、分別有ること無く、寂然として無為なるを、之れを理入と名づく。

行入とは、謂うところの四行にして、其の余の諸行は、悉く此の行中に入る。何等をか四と為すとならば、一つには報怨行、二つには随縁行、三つには無所求行、四つには称法行なり。

云何が報怨行なる。道行を修する人は、若し苦を受くる時、当に自から念じて言うべし、我れは往昔より、無数劫中に、本を棄てて末に従い、諸有に流浪して、多く怨憎を起し、違害すること限り無し。今は犯すこと無しと雖も、是れ我が宿殃にして、悪業の果の熟するのみ、天非人の能く見与する所に非ず、甘心忍受して都て怨訴する無しと。『経』に云く、「苦に逢うも憂えず、何を以ての故に、識は本に達するが故に」と。此の心の生ずる時、理と相応し怨を体して道に進む、是の故に説いて報怨行と言うなり。

第二に随縁行とは、衆生は無我にして、並びに縁業の転ずる所なれば、苦楽斉しく受くること、皆な縁より生ず。若し勝報・栄誉等の事を得るも、是れ我が過去の宿因が感ずる所にして、今方に之れを得たるのみ、縁尽くれば還た無なり、何の喜びか之れ有らん。得失は縁に従って、心に増減無く、喜風にも動ぜず、冥に道に順う、是の故に説いて随縁行と言うなり。

第三に無所求行とは、世の人は長に迷うて、処処に貪著するを、之れを名づけて求と為す。智者は真を悟り、理として俗と反し、心を無為に安じ、形は運に随って転じ、万有斯に空じて、願楽する所無し。功徳と黒闇と、常に相随逐す、三界の久居は、猶お火宅の如く、身有れば皆な苦なり、誰か安んずることを得ん。此の処に了達す、故に諸有に於て想を息めて求むる無し。『経』に云く、「求むること有れば皆な苦なり、求むること無くんば、則ち楽し」と。判らかに知んぬ、求むること無きは真に道行たることを。

第四に称法行とは、性浄の理を、之れを目けて法と為す。此の理は衆相斯に空じて、染無く著無く、此も無く彼も無し。『経』に云く、「法は衆生無し、衆生の垢を離れたるが故に。法は我有ること無し、我の垢を離れたるが故に」と。智者は若し能く此の理を信解すれば、応当に法に称って行ずべし。法体は慳むこと無ければ、身命財に於て、檀を行じて捨施し、心に悋惜すること無く、三空に達解して、倚らず著せず。但だ垢を去らんが為めに、衆生を摂化して、而も相を取らず。此れを自利して復た能く利他し、亦た能く菩提の道を荘厳すと為す。檀施既に爾れば、余の五も亦た然なり。妄想を除かんが為めに、六度を修行し、而も行ずる所無きを、是れを称法行と為す。

いったい、真理にいたる方法は多いが、つづめていえば、二つにつきる。第一は、原理的ないたり方であり、第二は実践的ないたり方である。原理的ないたり方というのは、経典によって仏教の大意を知り、生きとし生けるものは、凡人も聖人もすべて平等な真実の本質を持っているが、ただ外来的な妄念にさえぎられて、その本質を実現することができぬだけのことだと確信するのであり、もしも、妄念を払って本来の真実にかえり、身心を統一して壁のように静かな状態にたもち、自分も他人も凡人も聖人も、ひとしく一なるところに、しっかりと安住して動かず、けっして言葉による教えによらないならば、それこそ暗黙のうちに真理とぴったり一つになり、分別を加えるまでもなく、静かに落ちついて作為がなくなる。これを原理的ないたり方と呼ぶ。

次に、実践的ないたり方というのは、謂うところの四つの実践であり、その他の多くの実践は、すべてこれらのいずれかに含まれるのである。四つとは何かというと、第一は前世の怨みに報いる実践であり、第二は因縁に任せる実践であり、第三はものを求めぬ実践であり、第四はあるべきようにある実践である。

まず、前世の怨みに報いる実践とは何かと言えば、修行者たちが、もし苦しみに出遇うとき、自分の心に次のように反省するのである。――わたしはずっとずっと昔から、無限の時間にわたって、本当の自分を忘れて末端を追い、多くの迷いの世界にさまよい、多くの怨みや憎しみの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

心をおこし、限りなく他と対立し人を害ってきた。今は罪を犯すことがないにしても、この苦悩はすべて自分自身の前世の罪業が実ったのであり、神や悪魔が現じ与えたのではないと、こう考えて甘んじて忍従し、けっして怨んだり弁明したりせぬのである。ある経典に、「苦しみに逢っても気にするな。なぜなら、お前の意識はみずから深く根本に通じているから」と言っている。こんな考えが起るとき、人は本来の原理と触れあい、怨みを契機として道に進むことができる。それで、怨みに報いる実践をすすめるのである。

第二の因縁に任せる実践というのは、生きとし生けるものは自我がなく、すべて因縁の力に左右されていて、苦楽をひとしく感受するのも、いずれも縁によって起ったことだと考えるのである。だから、もし好ましい報いや名誉などを得ても、それはすべて自分の過去の宿命的な原因がもたらしたもので、今はあたかもそれを得はしたが、因縁が尽きればふたたび無に帰するのであるから、喜ぶべきことは何もないと考えるのである。したがって、世間的な成功や失敗は、すべて因縁によるのであり、自分の心そのものはなんの増減もないから、喜ばしいめぐり合わせにも動かされず、暗黙のうちに真理に契うのだ。それで、縁に任せる実践をすすめるのである。

第三にものを求めぬ実践というのは、世間の人々はつねに迷っていて、どんな場合にもものをむさぼるが、これはつまり希求である。ところが、智者は真実を悟り、本質的に世俗と次元を異にし、心を自然で作為なきところにおちつけ、身体もまた運命の動きにまかせ、あらゆる存在を実体なきものと考え、物質的な欲をもたぬのである。周知のように、美しい姉の功徳天と醜い妹の黒闇女は、つねに互いに伴って離れぬ。三つの基礎からなる老朽した現実の住居は、あたかも火のついた屋敷のように危く、肉体のあるかぎり、人はみな苦しい。何びとかそこに安住することができよう。以上の点をよく反省するなら、もとより一切の存在の中にいて欲念をやめ、希求することもない。ある経典に、「希求すればすべて苦しい、希求せぬときこそ楽しい」と言っている。これによって、希求せぬことこそ、まことに真理の実践であることが、はっきりと知られる。

第四に有るべきように生きる実践とは、万物が本質的に清浄であるという原理を、これをあるべき有り方（法）と名づけるのであり、この根本原理からすると、あらゆる現象はすべて空しく、そこには汚れもなく執著もなく、此と彼の対立もない。ある経典に次のように言っている、「理法は、生存者としての実体をもたぬ、生存者としての汚れを超えているからである。また理法には自我がない、自我の汚れを超えているからである」と。智恵ある人が、もしこの真理を深く体得することができるなら、彼はかならず有るべきように生きるはずである。およそ存在そのものは、物惜しみすることがないのだから、肉体や財産を挙げて、施しの徳を実践し、心にものを惜しむことがないのである。彼は、自分と相手と施物との三者がもともと空であることをよく了解し、何ものをもたのまず、何ものにもとらわれず、ただ世間的な汚れを清めるためにのみ、すべての生きものを助け導きつつ、しかもそうした相対性にとらわれぬ。これこそ自利であるとともにまた利他であり、さらによく悟りの道を飾ることともなるのである。施しの徳がかくのごとくである以上、他の五種の波羅蜜についてもやはり同じである。妄想を除くために六種の波羅蜜の行を実践しつつ、しかも行ぜられるものがないのであり、これがあるべきように生きる実践である。

○理入　本来の真理性を完うする立場。「理」は道そのものであり、本よりあるもの、人間の本性をいう。「入」とは、『維摩経』に「入不二法門」というように、広く悟入の意とみてよい。すなわち、真理と一つになり、たたえた水のように静かに動かず、理のままに知るのが理入であり、そこにはもはや理もなく、入ということすらない。なお、理行二入の説は『金剛三昧経』の入実際品によるというが、最近の研究では、『金剛三昧経』は唐初に偽作された経典で、逆に達摩の二入説を仏説として裏づけることを、一つの意図としたものであろうとされていて、達摩の二入説の独創性をうかがうことができる。○藉教悟宗　経典によって大意を知る。従来の仏教学のように、文字そのものの訓詁によらぬ意。○深信　深く禅定に入ることそのことをいう。

神秀の『観心論』に、五分法身香を説き、第二の定香を「深く大乗を信じて、心が退転せぬこと」とするのが参考となる。○含生　生命あるもの。含識、含霊に同じ。○真性　本来の性質、真実の本性。真は老荘の語で、元来は中国的な考え方。○客塵　煩悩をいう。『維摩経』問疾品に、「菩薩は客塵煩悩を断除す」とあり、クマーラジーヴァの注に、「心はもともと清浄で塵垢があるわけでなく、塵垢は事が合して生ずるのであり、心に対して客塵となる」とある。○捨妄帰真　真が本来であり、妄はこれを見失った偶然性にすぎぬとする考えが、この背景になっている。○凡聖等一　『維摩経』菩薩品の弥勒章に、如は不二不異とあり、僧肇の注に、「凡聖一如である、どうして得失の別があろう」という。○更不随於文教　「更不」は強い否定を示す言葉。○与理冥符　『涅槃経集解』第一の道生の言葉にいう、「いったい、真理は自然で、悟りとは知らず識らずの中に一致することだ。」○寂然無為　僧肇の『涅槃無名論』にいう、『経』に有余涅槃、無余涅槃とあり、ニルヴァーナという言葉は、中国語では無為と訳し、滅度ともいう。無為とは、虚無寂寞（何もなくてしずか）で、すぐれて有為の世界を超えるという意であり、滅度とは、大きな患い（肉身があること）がとこしえに滅して、四つの流れ（欲、有、見、無明）を渡り切っているという意である。」○行入　実践の立場を指す。『涅槃経集解』第十五に、次のような道生の言葉がある、「理法そのものはたとえた水のように静かである、何が興り何が没するということがあろう。ただこれを行ずれば盛んとなり、行じなければ衰えるまでだ。」○報怨行　恵思の『安楽行儀』にいう、「打たれ罵られて怒らぬのは、世俗的な戒律では外面的な忍耐の所作である。内面的に空を観察して、音声が空に等しく、身も心も空寂と知って、怨憎を起さぬのが、初心の菩薩の息世譏嫌戒である、三学を修めるのに、忍耐を方便とするのは真の菩薩の行ではない。」○宿殃　前世のとが。○非天非人所能見与　「見与」という語の意味は明らかでないが、しばらく、現じあたえる意とする。○経云　何の経か明らかでない。○逢苦不憂　のち〔三三〕に、経の句とせずに引かれる。○識達本故　『四十二章経』にいう、「出家沙門なるものは、欲を断ち愛を去り、自心の源を識り、仏の根本原理に達し、無為の法を悟り、内に得るところなく、外に求むるところなく、心を道に繋がず、亦た業を結ばず、無念無作にして、修にあらず証にあらず、諸位を歴ずして自から崇敬せられるのを、これを道と名づく。」○与理相応　理は、理入の理を指す。報怨という卑近の行為に即しつつ、本来の理の裏づけを失わぬこと。○随縁行　因縁に随順する行為。○衆生無我　次の称法行のところに引く『維摩経』の、「法は衆生なし」の句の注を参照せよ。○喜風　『臨済録』の示衆に、「你が一念心の喜、風に来り飄さる」とあり、喜の情に動揺されること。○無所求行　『維摩経』不思議品にいう、「もし法を求めようとするなら、何ものも求めてはならない。」○理将俗反　原理的に真は俗と対極の関係にある意。「将」は「与」と同じ。○安心無為　安は定著させること。無為は、先に引くようにニルヴァーナの訳語として用いられる。○形随運転　身体を自然の運行にまかせて、それのままに動く。形は、からだ。上文の心に対する句。○万有斯空　心を無為におき、身を自然の運行にまかせるから、有為なるものはすべて空ぜられる。○功徳黒闇　功徳天と黒闇女という二人の姉妹の話。『大般涅槃経』聖行品に見える故事による。○三界久居…　『法華経』譬喩品の偈に、「三界は安きことなく、猶お火宅のごとし」というのによる言葉。三界は、迷いの現象を欲界（婬欲と食欲のある世界、一般に六道と言われるもののすべて）、色界（欲を離れた瞑想の世界で物質のみがある）、無色界（物質をも離れた心の世界）の三つに分つもの。○有身皆苦　『老子』第十三章にいう、「人は大患となるものを自分の身と同じように大切にしているが、われわれに大患があるのは、自分に身があるからである。自分に身がなくなれば、自分に何の欲望があり得よう。」○経云　何の経か明らかではない。○有求皆苦…　この句は、黄檗の『宛陵録』のはじめにも見える。○判知　結論の言葉。「判」は明の意。○称法行　空の真理そのものに立つ行動。相手を予想せぬ立場。法は、ここでは理入の理をいう。○性浄之理　本性清浄の理。汚れを除いて清浄となるのではなく、それ自体清浄であること。無自性空なること。○経云　『維摩経』弟子品（目連章）の句。経文は、心情、アートマン（自我）、寿命、プドガラ（個人）の四つの実体的存在を批判する一段で、ここに引かれるのは初めの二つである。○法体無慳　存在そのものは、物惜しみの心や、むさぼりの念がない。ここでは、法は理法よりも存在の意に近い。のちに〔四八〕に、「心体無体是法体」とある。○行檀捨施　檀は、ダーナの音写で、財を施し、真理を教え（法施）、怖れを除いて安心感を与える（無畏施）三種の施しがあるという。ここでは、広く六波羅蜜の第一の例としてとりあげ、他を略したもの。○三空　一般には、空、無相、無願の三つをいうが、ここでは、布施について、施者と受者と施物という三者の相を捨

てて、とらわれのない清浄の行となるべきをいう。○菩提之道　菩提は、旧訳で道、新訳で覚という。○六度　六種の波羅蜜の行。施し、戒め、忍耐、努力、禅定、悟りの六つ。度は、パーラミターの訳で、究竟、完成などの意。

〔三〕吾恒仰慕前哲、広修諸行、常欽浄土、渇仰遺風。得逢釈迦、証大道者巨億、獲四果者無数。実謂天堂別国、地獄他方、得道獲果、形殊体異。披経求福、潔浄行因。紛紛繞繞、随心作業、向渉多載、未遑有息。始復端居幽寂、定境心王。但妄想久修、随情見相、其中変化、略欲難窮。末乃洞鑒法性、粗練真如、始知方寸之内、無所不有、明珠朗徹、玄達深趣。上自諸仏、下及蠢動、莫非妄想別名、随心指計。故瀉幽懐、聊顕入道方便偈等、用簡有縁同悟之徒。有暇披攬、坐禅終須見本性。会也融心令使浄、瞥起即便是生滅、於中憶想造邪命、覓法計心業不遷。

吾れ恒に仰いで前哲を慕って、広く諸行を修し、常に浄土を欽んで、遺風を渇仰す。釈迦に逢うことを得て、大道を証するもの巨億、四果を獲るもの無数なり。実に謂えり、天堂は別国、地獄は他方にして、道を得、果を獲れば、形殊なり体異なると。経を披き福を求め、行因を潔浄にし、紛紛繞繞として心に随って作業すること、向に多載に渉って、未だ息むこと有るに遑あらず。始め復た幽寂に端居し、境を心王に定むるも、但だ妄想久しく修めて、情に随って相を見、其の中の変化は、略ぼ窮め難からんと欲す。末に乃ち洞らかに法性を鑒、粗ぼ真如を練って、始めて知る、方寸の内に有らざる所無く、明珠朗らかに徹し、玄く深趣に達して、上は諸仏より下は蠢動に及ぶまで、妄想の別名にして、心に随って指計するに非ざるは莫きことを。故に幽懐を瀉いで、聊か入道方便偈等を顕わし、用って有縁同悟の徒を簡ぶ。暇有らば披攬せよ、坐禅して終須に本性を見ん。

会也心を融かせば浄からしむるも、
瞥起せば即便ち是れ生滅なり。
中に於て憶想するは邪命を造すのみ、
法を覓め心を計るも、業は遷らず。

わたくしは、いつもすぐれた先輩をうやまい、広くさまざまの修行を実践し、つねに仏陀の国をなつかしみ、渇えた人のようにその残された教えを慕ってまいりました。さいわいにも、生きた釈迦仏にめぐり会うことができ、大いなる真理を悟ることは限りがなく、四つの究極の果を身にうることも数えようがありません。従来、わたくしは極楽がこの世の外の国であり、地獄も別のところにあるとばかり考え、真理を得、果を得れば、われわれの肉体が他のものに変ると信じて、経典をひもといては来世の浄福を望み、この世の生活を清浄で有意義なものにしたいと思い、ごたごたがさがさと、心の向うままに修行を重ねてまいりました。こうしてすでに多年のあいだ、わたくしの心はなお安らぐ暇もありませんでしたが、そうしたあと、始めて奥深く静かな所に身を正して坐し、心の根本を統一的に落ちつけようとしました。しかし、誤った臆見による長い習慣のために、感情にひきずられ現象の相にとらわれ、そこに現われる変化の相は、何ともつきとめがたい始末でありました。そうこうしてのち、わたくしはようやく真理の本質をはっきりと見とどけ、どうにか真実を自分になじませました。そのとき初めてわたくしは、自分の胸中に存せぬものは何もないことに気づき、心は透明な真珠のように輝きわたり、根源的な消息に深く達することができました。そして、上は諸仏より下は虫けらに至るまで、それらの現象的な差別は、すべて自分の胸中の妄想の別名でないものはなく、自分の心が勝手にこれは何々だと規定したにすぎぬことを知りました。それで、ひそかなる懐いを吐露して、とりあえず「真理に至る手だての歌」その他をあきらかにし、志を同じくする有縁のかたがたを探しだそうとするのです。どうか暇をみてご覧になってください。坐禅によってきっと本当の自己を見とどけられるにちがいありません。

もしも心をやわらげるなら、それを清浄にすることができるが、
一念でも分別の心を起すと、そのときすでに生滅だ。

真理の中であれこれと妄想するのは、よこしまな生活を営むものであり、外に真理を求めてあれこれと思いはかっても、宿命的な業は変らぬ。

○吾恒仰慕前哲　以下の手紙の序文に当るもの。○釈迦　生けるシャキャムニ。ここではよき大乗の指導者。○四果　小乗で修行の段階とそれぞれの悟りの境地を四種に分類したもの。須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢の四つをいう。○形殊体異　現世の身体が死んで、他のところで別の身体を得ること。○定境心王　おのれという主体を心王の位に据える意。心王は、心所（心のはたらき）に対して、その主体となる点をいうが、禅録では、心そのものを王者に譬えることが多い。○略欲難窮　「略欲」は解しがたいが、おそらく「ほとんど…するほどである」の意であろう。○末乃　前の「始復」に対していう。○法性　無自性空なるところ。のちに〔七二〕の憐禅師の言葉に、「法性無体直用莫疑」とあるのをみよ。○明珠朗徹　次の〔四〕のマニ宝珠の譬喩についてみよ。○莫非妄想別名　『続高僧伝』の習禅篇の総論にいう、「こうして思慮の及ぶところ、智恵のはかるところ、すべて妄想の境が心を惑わすのでないものはないことがわかる。それはすべて、意識の浪を返照することができないで、対象にとらわれ心を動かして、静かな波も激動して、多く精神統一の障りとなるからである。」○指計　指ざしてくらべる。これは仏、これは凡人ときめること。○瀉幽懐　ひそかな思いを文章に表現する。「瀉」は、「瀉情」「瀉憂」などいうように、心中の思いを外に注ぎだし、表現すること。○入道方便偈　次にある七言四句がそれであろう。○簡有縁同悟之徒　法縁にめぐまれ、本心を知り合った仲間をえらぶこと。簡は、他と区別する意。○坐禅　達摩の壁観が、具体的にどんな瞑想法によるものであったか、以上のところでは明らかでないが、ここにいささか唐突に坐禅という語があることは注目してよい。○終須見本性　「終須」は「まちがいなく」の意。またここで、「本性を見る」といっているのは、達摩門下の関心が、つまるところ見性にあったことを示すもの。○会也　俗語。もしも。○融心融は、通る意。隋の仙城恵命に『融心論』の作がある。○警起　わずかに起る、ちらりと動く。○邪命　誤った手段による生活。また、正しくない生活手段。○寛法計心　原本はいずれも「心」の字を欠くが、今かりに補ってとのえる。○業不遷　業の支配から逃れえぬこと。身口意の三つの行為を、自分で固定化する意。

〔四〕　展転増垢心難究竟。智者暫聞八字、即便悟理、始知六年徒労苦行。世間遙遙尽是魔人、徒自喧喧、空為鬪諍。虚妄作解、教化衆生、口談薬方、不除一病。寂寂従来本無見相、何有善悪及与邪正。生亦不生、滅亦不滅。動則不動、定則非定。影由形起、響逐声来。弄影労形、不知形之是影、揚声止響、不知声之是響根。除煩悩而求涅槃者、喩去形而覓影。離衆生而求仏者、喩黙声而尋響。故知迷悟一途、愚智非別。無名処強為立名、因其名即是非生矣。無理処強為作理、因其理即諍論興焉。幻化非真、誰是誰非、虚妄無実、何有何無。当知得無所得、失無所失。未及造談、聊申此句、詎論玄旨。

展転して垢を増して、心は究竟し難し。智者は暫く八字を聞いて、即便ち理を悟り、始めて知る、六年徒労に苦行せしことを。世間は遙遙として尽く魔人、徒自に喧喧として、空しく鬪諍を為す。虚妄に解を作して、衆生を教化するも、口に薬方を談じて一病をも除かず。寂寂として従来、本より見相無し、何ぞ善悪及与び邪正有らんや。生ずるも亦た生ぜず、滅するも亦た滅せず、動ずるときも則ち動ぜず、定むるときも則ち定むるに非ず。影は形に由って起り、響は声を逐うて来る。影を弄し形を労することは、形が是れ影なることを知らず。声を揚げて響を止むることは、声が是れ響の根なることを知らざるなり。煩悩を除いて涅槃を求むるものは、形を去って影を覓むるに喩え、衆生を離れて仏を求むるものは、声を黙して響を尋ぬるに喩う。故に知る、迷語は一途、愚智は別に非ざることを。名無き処に強為て名を立て、其の名に因って即ち是非は生じ、理無き処に強為て理を作り、其の理に因って即ち諍論ここに興る。幻化は真に非ず、誰か是とし誰か非とせん、虚妄は実無し、何をか有とし何をか無とせん。当に知るべし、得るも得る所無く、失うも失う所無きことを。未だ造り談ずるに及ばず、聊か此の句を申ぶるのみ、詎ぞ玄旨を論ぜん。

われわれの心は、次から次へと汚れを増すばかりで、究極に至りがたいが、智恵ある人（仏陀）は、わずか八字の教えを聞いただけで、すぐさま真理にめざめ、初めて六年のあいだ空しく苦行を重ねて来たことに気づいたという。世の中はどこもかしこも、みな魔人ばかりで、いたずらに喧しくさわぎ立てて、空しく争いをくりかえすにすぎぬ。ある人は、理由もなく臆見を起して、他の人々を教え導こうとするが、彼らは口に薬の調合を論ずるのみで、一つの病気も治療することがない。万物はいとも静かにすでにとこしえに存していて、もともと臆見妄想などありはせぬのに、どうして善悪や邪正があろうか。物は生じても生ぜず、滅しても滅せず、動いても動かず、おちついてもおちつくことはない。

いったい、影は自分の身体によって生じ、反響は叫び声を追ってやってくる。愚かな人は、影を把えようとして、自分の身体を疲労させるばかりで、自分が影の本であるのに気づかず、声を高くして反響を消そうとして、声が反響の本であるのに気づかぬ。迷いを除いて悟りを得ようとするのは、譬えば、自分の外に影を探すようであり、人間を離れて仏を求めるのは、譬えば、叫び声をとどめて反響を尋ねるようなものだ。こうして、迷いと悟りは一つであり、愚と智とは別ものでないことがわかる。もともと名づけようのないものに強いて名をつけるから、その名によってただちによしあしの情が生れる。もともと理屈などないところに強いて理屈をつけるから、その理屈によってたちまち争いが起るのである。奇術師の演出は、すべて実あるものではないのに、何びとを是とし何びとを非とするのか。虚妄は実体がないのに、何が存在し何が非存在だとするのか。まさに知るべし、ものを得ても得られるものなく、失っても失われるもののないことを。いまだ直接にお話し申し上げるおりがありませんので、とりあえず、以上のことを書き送ります。とても根本的なことを論じえませんけれども。

おそらく、前の〔三〕とは別な手紙の断片であろう。首尾一貫したものらしくないが、『続高僧伝』第十六で、この一段の後半を向居士が恵可にあたえたものとしているのをみると、前半もまたこれに類したものらしい。○展転ころがる。そむく。○智者暫聞八字　故事は明らかでないが、あるいは、仏陀の前身物語に、彼が雪山童子として苦行していたとき、羅刹が「諸行無常、是生滅法」（移りゆくものは永遠性なく、すべて生じたり滅したりする存在である）という八字の偈を口ずさんでいるのを聞いて、あとの半偈を知るために、みずから身命を捨てた話によるものかと言われる。古来、『涅槃経』第十四の聖行品その他で有名であった。また、『文殊問経』などに、八字はインドの文字の根本となる八種の字母で、初めにこれを習うことによって、一切の法に通ずるという考えもある。○始知六年徒労苦行　仏陀が、六年間の苦行の無意味なことを知り、瞑想に入ったのを指す。○徒自　いたずらに。むやみに。俗語。○口談薬方不除一病　いずれかの経典によるものらしいが、目下のところ、出所を明らかにしえない。○生亦不生…　般若の根本的な立場。○影由形起　以下を『続高僧伝』第十六に、向居士が恵可に与えた手紙とし、『楞伽師資記』、『念仏三昧宝王論』下、『宗鏡録』第三十二、その他にも引かれる。○除煩悩而求涅槃者…　七世紀後半頃に作られた偽経『仏説大弁邪正経』に、これとまったく同じ一段がある。○無名　名声のないところを本来とするのは、老荘の立場である。○強為　しいて。わざと。俗語。○幻化非真　非真は、僧肇の不真空の意で、実体性がないということ。「真実でない」という意ではなかろう。次の虚妄無実についても同じ。○未及造談…　手紙の末尾の言葉。『続高僧伝』では、次に恵可の返書をのせる。云く、「君は真理がすべて如実であると言われる。まことに、真幽の理と少しもたがわぬ。人々は、本来のマニ宝珠を見失って、瓦礫だと思い込んでいるが、忽然と悟ってみれば、そのまま真珠にほかならぬ。無明と智恵とは一つであって異ならぬ。畢竟、万象はそのままずべて真如であるとわかる。対立観念をもった連中をかわいそうに思うゆえ、意見をのべ注意してこの手紙を書く次第である。わが身が仏と差別されぬことを見ととげるなら、どうしてさらにあの無余涅槃など求める必要があろう。」

〔五〕　諸仏説空法、為破諸見故。而復著於空、諸仏所不化。生時唯空生、滅時唯空滅、実無一法生、実無一法滅。一切法為貪欲無内亦無外、亦不在中間。分別是空法、凡夫為所焼。邪正無内外、亦不在諸方。

分別是空法、凡夫為所燒。一切法亦如是。

「諸仏が空法を説くは、諸見を破せんが為の故なり。而るに復た空に著せば、諸仏の化せざる所なり。」

「生ずる時は唯だ空が生ずるのみ、滅するときは唯だ空が滅するのみ。実に一法の生ずる無く、実に一法の滅する無し。」

一切の法は貪欲の為に起る。

「貪欲は内無く亦た外無く、亦た中間に在らず。分別は是れ空法なるに、凡夫は為に燒かる。」

「邪正は内外無く、亦た諸方に在らず。分別は是れ空法なるに、凡夫は為に燒かる。」

一切の法も亦た是の如し。

「仏たちが、空の道理を主張されるのは、人々の臆見を破るためだ。それだのに、空という言葉にとらわれるなら、仏たちも導きようがない。」

「ものが生れるときは、本来の空が生れるのであり、ものが滅するときは、本来の空が滅するのである。実際には一物も生ずることなく、一物も滅することはない。」

すべての存在は、人々の貪りの心によって、その形を表わす。

「貪りの心は、内にあるのでもなければ、外にあるのでもなく、また中間にあるわけでもない。分別は空しい存在であるのに、愚かな人々は、それに燒きこがれる。」「ものの邪正は内や外になく、またどこか他の所にあるのでもない。分別は空しい存在であるのに、愚かな人々は、それに燒きこがれる。」

その他、あらゆる存在についても、まったく同じことである。

○諸仏説空法…　多くの引用句を書きつけた一段。最初の句は、『中論』の観行品第十三の偈で、『三論玄義』の顕法正第二や、『摩訶止観』第四上などに引かれる。○生時唯空生…　同じく『中論』の観法品第十八に、「諸仏はあるときは自我があると説き、あるときは自我がないと説く。諸法実相の中には、自我もなければ非我もない」とある偈の青目注の部分に見える句。ただし、一致するのは前の二句のみであり、他の文献より引かれたのかもしれない。○実無一法生…　『如来荘厳智恵光明経』下に同趣旨の言葉がある。○一切法為貪欲而起　この句は、おそらく後人の注の混入であろう。○貪欲無内亦無外　以下は、『諸法無行経』の句によるもの。○一切法亦如是　この句も、おそらく後人の注の混入。

〔六〕法身無形、故不見以見之。法無音声、故不聞以聞之。波若無知、故不知以知之。若以見為見、有所不見。若以無見為見、即無所不見。若以知為知、有所不知。若以無知為知、無所不知。不能自知非有知、対物而知非無知。若以得為得、有所不得。若以無得為得、無所不得。若以是為是、有所不是。若以無是為是、無所不是。一智恵門入百千智恵門。見柱作柱解、是見柱相作柱解。覩心是柱法無柱相。是故見柱即得柱法。見一切形色亦如是。

法身は形無し、故に不見にして以て之れを見る。法は音声無し、故に不聞にして以て之れを聞く。波若は知無し、故に不知にして以て之れを知る。若し見を以て見と為せば、見ざる所有るも、若し無見を以て見と為せば、即ち見ざる所無し。若し知を以て知と為せば、知らざる所有るも、若し無知を以て知と為せば、知らざる所無し。能く自から知らざれば、知有るに非ざるも、物に対して知れば知無きに非ず。若し得を以て得と為せば、得ざる所有るも、若し無得を以て得と為せば、得ざる所無し。若し是を以て是と為せば、是ならざる所有るも、若し無是を以て是と為せば、是ならざる所無く、一智恵門もて百千の智恵門に入る。柱を見て柱の解を作すは、是れ柱の相を見て柱の解を作すのみ。心が是れ柱の法なりと覩れば、柱の相無し。是の故に、柱を見て即ち柱の法を得なり。一切の形色を見るも亦た是の如し。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com